The University of Osaka
Institutional Knowledge Archive

Title	「丁固夢松」故事小考 ： 十八歳の意味転換を中心に
Author(s)	馬, 超
Citation	若手研究者フォーラム要旨集. 2025, 11, p. 25-28
Version Type	VoR
URL	https://doi.org/10.18910/102715
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

https://ir.library.osaka-u.ac.jp/

The University of Osaka

「丁固夢松」故事小考

―十八歳の意味転換を中心に―

演劇学　博士後期課程２年
馬　超

はじめに

『未刊謡曲集』に収録されている珍曲「丁固」に関する先行研究は管見の限りでは石井倫子氏の「〈丁固松〉小考」[1]一本しかない。石井氏が能の典拠を『蒙求』の「丁固生松」（「初固為尚書、夢松樹生其腹上謂人曰、松字十八公也、後十八歳吾其為公乎、卒如夢焉」）であることを指摘した上で、本作品における「君十八の御歳三公の位にならせ給ふべき」の設定に関して、石井氏が「当御代のはじめのために書きたる能」(『申楽談儀』)、すなわち家督相続した足利四代将軍義持を祝福するために作られた能であることと同様の事情を想定するならば､本作品はまだ年若い将軍、九代の足利義尚を丁固になぞらえ、その治世を祝福するために作られた能だということになると推測をしている。しかし、本曲では、明らかに『蒙求』の本説から改変されており、その理由についてまずは検討すべきであろう。本論はその変容の様子を確認した上で､「丁固生松」の日本における享受の実像を捉えてみたい。

原典の「十八歳」

本曲では、丁固が松の木が腹の上に生えるのを夢に見て、人に「松の字は十・八・公からなる。十八年後、私は三公になっているであろう」と言い、結局夢のとおりになったという霊験談が用いられているが、原典が三国時代の陳寿によって書かれた『三国志』本文には見られず、代わりに南朝宋の裴松之の『三国志』注にある。そこから引用すれば次のようである。

呉書曰、初固為尚書、夢松樹生其腹上、謂人曰、松字十八公也、後十八歳、吾其為公乎、卒如夢焉。[2]

『呉歴』と『呉書』は三国時代呉国の地方誌であるが、散逸したために確認できない。それに

---

[1] 『銕仙』 (476) 、1999 年 10 月、 p 4-5
[2] 四庫全書本裴註『三国志･呉志･巻三』 p 20。

正史書の『三国志』が編纂していた時に用いられずに、裴注釈本に丁固に関する「腹生松」伝説が取り入れられている点からも「丁固生松」は、説話の一つと言ってよいだろう。右が、史実とは言えないことは「後十八歳」の解釈からも言えるだろう。史実としての丁固については、鳳皇2年（273年）に「司徒丁固卒」（司徒の丁固が死んだ）と裴注『三国志』に明記される。また、晋の虞預撰、同じく地方誌の『会稽典録』における「孫休時固為左御史大夫、孫皓即位、遷司徒、皓悖虐、固與陸凱孟宗同心憂國、年七十六卒」[3]という内容を参照すれば、丁固が生まれたのは東漢朝の建安3年（198年）になると考えられる。孫休が皇帝である時期（258―264）に左御史大夫であったのは、即ち丁固が61―67歳の間である。裴註『三国志』によれば、「丁固生松」説が記載されるのは宝鼎3年（268年）2月、司徒に昇進した時期なので、年齢は71歳になる。つまりいよいよ三公の「司徒」になったのは大臣の最高位になる夢が叶い、何よりもめでたいことになる。「後十八歳」は十八年後と理解すれば、「初固為尚書」の時は赤烏13年（250年）で、53歳になる。ただし「十八歳」は「三公」の「司徒」になると解釈すれば上述の史実にずれることになるし、その件自体もどうも不合理だと言わなければならない。

『蒙求』における「丁固生松」

「丁固生松」故事が世間に広がるのは唐の李翰によって作られた『蒙求』以降になる。本書本籍は伝統的な中国の初学者向け教科書で、古人の逸話を集めて韻文で並べた故事集になる。「丁固生松」がそのまま一句として残されるが、特に注釈は付されていない。『蒙求』は、日本でも平安時代以来長きにわたり読まれていたために、中国では唐の注釈本はほとんど散逸した一方、日本には宮内庁書陵部藏古鈔本という唐の古注釈の写本があり、上述の裴松之注『三国志』における詞章が引用されている。ただし、出典は『呉書』の代わりに『會稽録』としている。中国では南宋朝の徐子光（徐状元）の注釈によって『蒙求』の形が定着するようになり、「丁固生松」の出典資料を『呉録』としている。『呉歴』『呉書』『會稽録』『呉録』はいずれも散逸してしまったが、同文を相互に参考にする可能性もあるし、伝説を取った地方誌であるところは変わらない。日本に伝わってから写本も多数出ているが、鎌倉初期において源光行が『蒙求』から抜粋した故

[3] 『会稽典録・巻下・丁覧丁固』『四明叢書・第25冊』（広陵書社出版、ｐ15520）を参考。

事 250 編の和訳に、それぞれの内容に応じた和歌を添えて源実朝（1163―1244）に献上されたものと見られる『蒙求和歌』には次のように書いている。

丁固生松（子日）楚漢代人、為項羽将、丁公名固、季布母弟也　丁固尚書タリシ時夢乃内ニ腹ノ上ニ松オヒタリ見チ人ニ語云松字ハ十八公ナリ十八年ニシチ公タラムカト云ヘリ如夢云々　　トゝセヨリヤトセフリニシユメチヨリ子ノヒノ春ニアフノ松原ラ[4]

ここでは呉の人であるはずの丁固を楚漢代の人とする説が取られる。「十八年ニシチ」という言い方も「十八歳」の時に夢を見たと勘違いもしている。「子の日」に松の歌を詠むことは春の祝福になり、「ねの日するみかきのうちのこ松はらちよをはほかの物とやはみる」(『新古今和歌集』・巻七・賀歌・728）などにもその伝統の源が見られる。『蒙求』の影響を受けて、五山文学などの分野[5]には「丁固生松」が様々な形で語られる。

『和漢朗詠集』の注釈

明衡朝臣（藤原明衡）が「霜松抽節。験休徴於十八公之夢」（「奉為亡考小野宮右大臣四十九日追善願文」『本朝続文粋』）という如く、平安時代には「十八公の夢」が松の代名詞として使われることもあり、『和漢朗詠集』に所収の源順が作った一句「十八公栄霜後露　一千年色雪中深」も良く知られ、以下の通り、この詩に対する注釈も数多く出ていた。

1、會稽録云、丁固為嘗夢松生其腹上。謂人曰、松字十八公。十八歳、予其公乎。卒如夢焉。霜後、雪中者、歳寒意也云々。（東京大学本覚明『和倭漢朗詠集私注註』[6]）

2、十八公――、十八公ハ、松ノ名也。（中略）物語云、丁固ト云者、夢ニ、我カ腹ノ上ニ、松生ルト見テ、自合テ云、松ノ字ハ、十八公ト書ケリ。我十八ノ年、恐ハ、天子ノ位ニ登ラント思。終ニ、十八年ノ后、天子トナル。（書陵部本『朗詠抄』[7]）

3、丁固トイヒシ人、尚書トイヒテ、此朝ノ弁官ニアタレルツカサニ侍ケルトキ、ユメニ、ハラ

---

[4] 東京図書館蔵（故榊原芳埜納本）『蒙求和歌』。
[5] 例えば、五山僧の「盆松詩」（『続群書類従』第 19 輯下）や五山禅僧の詩偈の集大成の『翰林五鳳集』には丁固夢松の故事が見られる。他にも『親鸞聖人御旧跡絵伝解説書』『役行者御傳記』『日蓮宗全書・御書鈔・撰時鈔私見聞上』や聖徳太子傳注釈書の『太鏡底容鈔』などの仏教関係書にも言及される。
[6]『和漢朗詠集古注釈集成・第 1 巻』ｐ476
[7]『和漢朗詠集古注釈集成・第 2 巻下』ｐ420

ノウヘニ、マツオヒタリトミテ、人ニイヒケレハ、松ノ字ハ十八公トカケリ。イマ十八歳アリテ、ワレ公トナラムトイヒケリ。(『和漢朗詠集永済注』[8])

１のように『蒙求』に従う説を取ることもあるが、２のように天子の位に登るという斬新な発想もある。また３のように十八歳に公となる説も生まれた。牧野和夫[9]によれば、永済は鎌倉時代前期に、多武峰で活躍した僧で、成立時期は鎌倉時代中期以前と考えられる。片仮名交じりの和文体で書かれていることから、漢学の入門者や初学者を対象とした注釈書で、文芸創作面にもその影響が見られる。たとえば、狂言「松脂」[10]には、シテの「さらば松脂の目出たい威徳を語つて聞せう」に対して、アトが「夫松脂の目出たい仔細と云ッば、日の本に於いて其の数多しといへ共、唐土にて丁固といつし者の母、夢中に子の日の松を含み、胎内にやどるとみて男子をまう此子器用第一成事、其国にならびなし、去ば十八歳にして、王位にそなはる、故に松とは、十八公と書も此の謂れなり」と語る詞章は明らかに 2 の説を取っている。また、狂言「松の語」[11]には「扨も唐土にて。丁固といつし者の母。夢中に子の日の松をふくむと見。懐娠し出生したるその子。十八歳にして三公となる。それより松を十八公の゛いと」の詞章も永済説に従い、十八歳に三公となることを謡っている。

おわりに

狂言は多くの演者の管掌にあり、観衆の要望に応へて、おのづからなる変化成長が行われつつ室町時代の現実に立脚したものとされることと同じく、謡曲「丁固」においても、若い将軍の現実事情も無視できないが、「まだ初春のあさもよひ」の時間設定と「君十八の御歳三公の位にならせ給ふべき」の詞章、そして同じく『和漢朗詠集』から取った「風を逐て潜に開く。芳菲の候を」のセリフから見れば、恐らく謡曲の創作は『蒙求』の本説を取ったというよりは、朗詠集の注釈からの影響が強いことが、その変容の事実ではなかろうか。

---

[8]『和漢朗詠集古注釈集成・第 3 巻』ｐ161
[9] 牧野和夫 「中世の太子伝を通して見た一、二の問題（２）―所引朗詠注を介して、些か盛衰記に及ぶ―」『中世の説話と学問』 和泉書院、1991 年
[10]『和泉流狂言大成 第 1 巻』（山脇和泉 著、わんや江島伊兵衛出版）所収。
[11]『狂言舞謡集』（野々村戒三 校註、謡曲界出版部）所収。